

00309

ある。

昭和七年の二月、俊朗が高等一年の時、祖母が腦溢血でなくなつたので、スミさんは舅の元次さんを教會から家に引取ることにした。元次さんは喘息で寝たり起きたりしてゐたので、十六の時にはもう一人歩きは出来なかつた。

元次さんは若い時から非常に風呂好きで、毎晩入浴しなければ承知しなかつた。家に戻つてから二年間は俊朗が手を引いて毎日銭湯に通つたが、次第に歩くことも出来なくなつたので、俊朗がリヤカーに乗せて雨の日も風の日も風呂に通つた。

「余田の家はおふくろのスミさんが感心な人だと思つたら、悴までよく出来た。何とまああの俊朗さんのお母さん孝行、お祖父さん孝行なことヨ……」

「リヤカーに祖父を乗せて歩く少年」はいつしか美しい話題になつて、新聞にも掲載された。云ふが、元次さんはすつかりリヤカーに味をしめて、「橋普請があるさうな」、「麥がよく稔つ

たさうな、」田植が始まつたさうな、」或はお墓参り、親類廻りと、風呂場通ひの外に日々リヤカーに乗せるばかりではない。一人の母を助けて配達に廻る餘暇には、祖父の體を温いタオルで拭いてやつたり、便所の世話までしてやつた。しかも學校はいつも好成绩で、高等二年を卒業すると、家から二十町餘の商工專修學校の夜學に通つて勉強した。

かうして昨年七月末日に元次さんが七十三で歿するまで、俊朗が十二から一九まで七年間と云ふもの、松山の町に老人を乗せた孝行少年のリヤカーが、道人行く人の眼を潤ませたのであつた俊朗君は商工專修學校(現在松山青年學校)入學以來一日の缺席もなく、今は市立素鷲青年學校研究科一年に在學してゐるが、入學してから一日も缺席しないばかりか、青年學校への就學の勧誘、出席の督勵に努める傍ら、青年團の役員として出征歸還將兵の送迎その他に精進し、か

しも柔道は初段の腕前であるといふ。

00310

昭和十一年五月青年團より、同十二年一月縣知事より、青年學校模範生とし且つ篤行者として表彰され、同十四年一月又知事より三ヶ年以上の皆勤及び模範生として、同十四年三月には松山市長より實踐躬行の廉を以て表彰されてゐる

現在余田家は母一人子一人であるが、商賣は繁昌し、家屋敷も自分のものだし、刻苦奮闘の甲斐あつて相當の家産を積んでゐるが、勤儉力行は依然としてつゞけられ、朝夕は勿論、食外度毎には必ず神前に禮拜して天恩を感謝し町内の人々の恩を感謝してゐる。殊に町内のこと、銃後のことで寄附などの話があると、眞先に喜んで献金すると云ふことである。

シベリヤの雪の曠野に護國の華と散つた作造さんの英魂は、この妻、この子のけなげな暮しを見てどこしへに満足であらう。また神は必ずやこの立派な軍國の母子の上に厚い加護を垂れ給ふであらう。

△▽△▽△▽△▽

二月二十一日発行「週報」並ニ寫眞週報掲載内容  
左記ノ通

寫眞週報第百四號掲載内容

- 一 表紙 雪と闘ふロータリー
- 一 紀元の佳節を迎へた橿原神宮
- 一 紀元二千六百年のこの佳き日―東京で行はれた空陸海の立體的慶祝
- 一 砲煙の中に生れた仔馬
- 一 白鷺と闘ふ人々―裏日本一帯を襲つた十數年来の大雪と闘ふ機械力、人力の總動員
- 一 伊號第六十三潜水艦引揚げらる
- 一 雪原を愛國の血に染めて―戦亂のフィンランドから
- 一 第二回思想戦覧會誌上展

一 讀物 パーザ

- 事變を突破する 新經濟道德
- ソウイェト風土記―黒田乙吉
- 今年の冬の早天と火事と大雪―中央氣象臺技師島山久尙
- 電氣の節約はどうすればよいか
- 母子保護法とは―金子しげり
- 標準混食獻立(第五回)
- 海外小話 漫畫 銃後點描等

